

ダニエル書 - 第八十八番

偽りの「後の雨」の正体を暴く：2001年9月11日からの預言的な旅路

Jeff Pippenger

2024-02-21

天使が降臨すると始まる試しは、天使の手からその書を取って食べるかどうかという試みによって表されている。そのメッセージを食べることを選んだ者たちは、食べるのを拒んだ一団が取り残されるような失望に直面する運命にあった。食べるべきその小さな書は、1798年または1989年の「終わりの時」に最初に封印が解かれたそのメッセージにおける「知識の増加」を表しており、その後、それによって増し加わった光に対して当時生きていた世代に責任を負わせるメッセージとして体系化された。いずれの歴史においても、イスラムに関する預言が成就すると、天使の手にある食べるべきメッセージは受け入れられるか、拒まれるかのいずれかとなった。もしその書が表すメッセージが拒絶されるなら、それでもなお自分たちが神に選ばれた者だという主張を保とうとする者たちは、偽の「後の雨」のメッセージを生み出さざるを得なくなる。

2001年9月11日、アドベンチズムの諸世代における過去の反逆は、再び試金石となった。ハバクク書2章は、そこで示されている預言的歴史の中で起こる論争を示しており、それは十人の乙女のたとえに並行する預言の流れである。十人の乙女のたとえで表された歴史において、見張り人が自分は何と答えるべきかを尋ねたとき、彼は「幻を書き記し、それを板の上に明確にせよ」と命じられた。ミラー派の歴史の見張り人たちは1842年に1843年図表を作成し、その作成は道標となった。終わりに語るものは、板の上に明確にされたハバクク書2章の「幻」であった。

2001年9月11日の直後、第三の災いにおけるイスラムの活動を認識した者たちは、エレミヤの「古い道」に立ち帰り、その中を歩むように導かれた。その「古い道」は、黙示録8章13節の三つの災いがイスラムの預言的役割を表していることを示していた。その直後、フューチャー・フォー・アメリカは、ミラー派の歴史と並行する同じ時点において、ハバクク書2章の二つの図表を復刻し始めた。その二つの図表は道標として据えられたが、その道標は1842年に1843年図表の作成によって表されていたものである。

1842年5月、ボストン（[マサチューセッツ]）で総会が招集された。この会の冒頭で、ヘイバーヒルの兄弟チャールズ・フィッチとアポロス・ヘイルが、布に描かれ、成就を示す預言の数を記した、ダニエルとヨハネの預言の図を提示した。フィッチ兄弟は総会の席上で自らの図表を用いて説明し、これらの預言を調べるうちに、ここに示しているようなものを作ることができれば主題が簡明になり、聴衆に提示するのが自分にとって容易になるだろうと考えた、と述べた。ここに私たちの歩みの道にさらに光が与えられた。これらの兄弟たちは、主がそれより2,468年前にハバククに幻のうちに示されたこと、すなわち「この幻を書き記し、板の上に明らかにせよ。走る者でもそれを読み取れるように。というのも、この幻はなお定められた時のためのものだからである」と言われたことを行っていた。ハバクク2:2。

この件についていくらか議論した後、このようなものを三百枚石版印刷することが満場一致で可決され、ほどなく実行された。これらは「43年の図表」と呼ばれた。これは非常に重要な会議であった。ジョセフ・ベイツ『自伝』、263頁。

「『原初の信仰』の上に立っていたとき、再臨運動の講師たちと諸紙の一致した証言は、あの図表の刊行がハバクク2:2, 3の成就であるということであった。もしその図表が預言の主題であったなら（そしてこれを否認する者は原初の信仰を離れるのであるが）、そのとき、2300日の起算点とすべき年は紀元前457年であったということになる。『幻』が『遅れる』こと、すなわち遅延の時があること、その間に、おとめたちの一団が、真夜中の叫びによって呼び覚まされる直前に、時に関するこの重大な主題についてまどろみ、眠ることになるためには、1843年が最初に公表された時でなければならなかった。」ジェームズ・ホワイト、『Second Advent Review and Sabbath Herald』第1巻、第2号。

さて、私たちの歴史が示しているのは、William Miller が用いていたのと同じ年代表を用いて教えていた者が何百人もあり、皆一様であったということである。当時、メッセージは一つの主題において一致していた。すなわち、主イエスの来臨がある特定の時、1844年に起こるということであった。Joseph Bates, Early SDA Pamphlets, 17.

2001年9月11日直後の時期における1843年図表と1850年図表の再版は、1842年に1843年図表が刊行されたのと同じくらいに、ハバクク書2章の成就であった。図表の作成はハバクク書2章の記述の一部であり、起こらなければならないことだった。2001年9月11日には、エレミヤの「古き道」に立ち帰ることを拒んだラオデキアのアドベンチストたちによって、1863年の反逆が再び繰り返された。

敵は、この終わりの時代に立ち向かう民を備えるという働きから、私たちの兄弟姉妹の思いをそらそうとしている。彼の詭弁は、この時の危険と務めから人々の思いを遠ざけるよう仕組まれている。彼らは、キリストがその民のためにヨハネに与えるべく天から来られた光を、取るに足らないものと見なす。彼らは、私たちの目の前に迫っている出来事は特別な注意を払うほど重要ではないと教える。彼らは天来の真理を無効にし、神の民からそれまでの経験を奪い、その代わりに偽りの学問を与える。「主はこう仰せられる。道に立って見よ、昔の道を尋ね、どれが良い道であるかを求め、そこを歩め。」[エレミヤ 6:16.]

「だれひとりとして、私たちの信仰の土台を引きはがそうとしてはならない——私たちの働きの初めに、祈り深くみ言葉を学び、また啓示によって据えられたその土台を。私たちはこの土台の上に、五十年以上にわたって建て上げてきた。人は自分が新しい道を見だし、すでに据えられているものよりも強い土台を据えることができると思い込むかもしれない。しかしこれは大いなる欺きである。「すでに据えられている土台のほかに、だれもほかの土台を据えることはできない。」[第一コリント 3:11] 過去には、多くの者が新しい信仰を築き、新しい原則を打ち立てようとしてきた。しかし彼らの建てたものはどれほど長く持ちこたえただろうか。まもなく倒れた。岩の上に据えられていなかったからである。」Testimonies, 第8巻, 296, 297.

エレミヤは、「昔の道」を歩むことが「安息」を見いだすことであり、その「安息」とは「後の雨」であると示している。その「後の雨」は、2001年9月11日にニューヨーク市の巨大な建物が崩れ落ち、諸国民が怒りに燃えたときに始まった。そのとき、そのメッセージを食べた者たちは、「幻を書き記し、はっきりと記せ」と命じられたハバククの見張り人となった。エレミヤは、「安息」すなわち「後の雨」の時に、まさにその同じ見張り人を示している。

主はこう言われる。道の分かれ道に立ち、見渡し、昔からの道、どこに良い道があるかを尋ね、その中を歩め。そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだす。しかし彼らは、「私たちはそこを歩まない」と言った。また、私はあなたがたの上に見張り人を立て、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った。しかし彼らは、「私たちは聞かない」と言った。エレミヤ書 6:16、17。

彼らが吹き鳴らすべきラッパは、ミラー派の歴史では第二の災いの第六のラッパであり、終末時代には第三の災いの第七のラッパである。ハバククの見張り人、すなわちエレミヤの見張り人は、1888年の反逆の際に退けられた警告のメッセージを告げる。1888年に退けられた第六のラッパは、ラオデキヤへのメッセージであった。

「A. T. ジョーンズとE. J. ワグナーによって私たちに与えられたメッセージは、ラオデキヤの教会への神のメッセージであり、真理を信じると称しながら、神から授けられた光を他者に映し出さない者には災いあれ。」『1888年資料』1053。

1888年の第七のラッパのメッセージは、1856年に最初にラオデキヤに向けて鳴り響き、その後、ラオデキヤへのメッセージは「七つの時」に関する光が増し加わっていくという文脈の中に置かれた。2001年9月11日には、エレミヤの「古い道々」に立ち返り、後の雨のメッセージを得るためにその道を歩むようにとの呼びかけの中に、ラオデキヤへのメッセージとして表されている第七のラッパの警告メッセージと、土台の象徴である「七つの時」が含まれていた。

パウロの書簡が述べる「強い惑わし」を生み出す、預言によって指摘されたその「嘘」は、女預言者の死から16年後の1931年に、ラオディキヤ的アドベンティズムの第三世代へと持ち込まれた。第三世代に到来したその「嘘」は、預言的には「タンムズのために泣く女たち」と表される時期に位置づけられており、したがって偽の後の雨のメッセージと結びついている。

その「嘘」がどのように広められたのかという詳細は理解されるべきであり、終末預言におけるその「嘘」の預言上の役割も同様に理解されるべきである。後の雨の時、すなわち十四万四千人の封印の時に、エルサレムを治めるあざける者たちは、エゼキエル書8章の「タンムズのために泣き悲しむ女たち」により表されているように、アドベンチズムの第三世代において偽の後の雨のメッセージを作り出した。彼らの偽の後の雨のメッセージは、エゼキエルによって、偽りの基礎、偽りの防壁、そして偽りの「平和と安全」のメッセージとしても表されている。

あなたがたはむなしい幻を見、偽りの占いを語ったではないか。「主がそう言われる」と言いながら、わたしは語っていないのに。ゆえに、主なる神はこう言う。あなたがたがむなしいことを語り、偽りを見たゆえに、見よ、わたしはあなたがたに敵対する

、と主なる神は言う。むなししいものを見て偽りを占う預言者たちに、わたしの手は臨む。彼らはわたしの民の集会に加えられることはなく、イスラエルの家の名簿に記されることもなく、イスラエルの地に入ることもない。こうしてあなたがたは、わたしが主なる神であることを知る。彼らが「平安だ」と言ってわたしの民を惑わせたからだ。平安はなかったのに、ある者が壁を築き、見よ、ほかの者は練られていない漆喰でそれに塗りを施した。練られていない漆喰でそれを塗る者たちに言え、「それは倒れる」と。あふれ出る豪雨があり、大きな雹が降り、激しい暴風がそれを引き裂く。見よ、壁が倒れたとき、あなたがたにこう言われまいだろうか。「あなたがたが塗ったその塗りはどこに行ったのか」と。それゆえ、主なる神はこう言う。わたしの憤りの暴風でそれを引き裂き、わたしの怒りの豪雨を降らせ、わたしの憤りの大きな雹をもってそれを滅ぼし尽くす。このようにして、あなたがたが練られていない漆喰で塗ったその壁を打ち壊し、地に倒してその基礎が露わになるようにし、それは倒れ、あなたがたはそのただ中で滅ぼされる。こうしてあなたがたは、わたしが主であることを知る。このようにして、わたしはその壁と、それを練られていない漆喰で塗った者たちの上にわたしの怒りを果たし、あなたがたに言う。「壁はもはやなく、塗った者たちもいない」と。すなわち、エルサレムについて預言し、彼女のために平安の幻を見るが、そこには平安のない、イスラエルの預言者たちのことである、と主なる神は言う。
エゼキエル書 13:7-16

イザヤ書二十八章と二十九章で、エルサレムのあざける者たちが拠り所として身を隠している虚偽と偽りは、ついには「押し寄せるむち」によって裁かれ、滅ぼされる。

また、わたしは裁きを測り縄とし、義を下げ振りとする。雹は偽りの避け所を一掃し、水は隠れ場を押し流す。あなたがたの死との契約は無効にされ、黄泉との協定は立たない。押し寄せる災いが通り過ぎるとき、あなたがたはそれに踏みにじられる。イザヤ書 28:17、18

イザヤの『押し寄せる災い』は、エゼキエルの『押し寄せる豪雨』であり、それは、『むなししい幻』を示し、主は『そう仰せられる』と主張し、『とはいえ』主は『語られなかった』のに、『偽りの占いをした』者たちの上にもたらされる。古の人々がその下に身を隠しているその『偽り』は、主が語られたと彼らが主張する何かとして描かれており、ゆえにそれは神の言葉についての『偽り』である。彼らは、神の言葉に基づく教義を誤りだと断定したか、あるいは、聖書の教義について、神が彼らの理解を導いた（神が語られた）と誤って主張したのである。

1931年に現れた「嘘」とは、ホワイト姉妹がダニエル書における「the daily」に関する誤った見解を支持したという主張であった。「the daily」がキリストの聖所奉仕を表すという誤った見解は、1910年にエレン・ホワイトがA・G・ダニエルズに対し、彼とプレスコットの「the daily」がキリストの聖所奉仕を表すという見解は実際には正しいのだと伝えたとする「嘘」に基づいていた。彼女自身のそれに反する直接の書面の言葉にもかかわらず。

1931年当時、ラオディキア的アドベンティズムの中で確立された「the daily」に関する誤った見解は、エゼキエルによって「平和と安全」と描写されるメッセージを築くために用いられた神学的土台となった。偽りの土台を支えるために用いられる種々の論拠は、

ミラーが夢の中で見たさまざまな偽物の硬貨や宝石に当たる。彼の夢の終わりには、もとの宝石は偽物やがらくたで完全に覆われ、そのがらくたや偽物の宝石・硬貨は、「the daily」がキリストの聖所での奉仕を表すという彼らの根本的誤りに基づくメッセージを象徴している。

エゼキエルの箇所では、がらくたや偽物の宝石は、「暴風」や「押し寄せる豪雨」の圧力に持ちこたえられないほど弱いセメントで築かれた「壁」にたとえられている。

ユダから来てヤロブアムを戒めた不従順な預言者は、ついには「ろば」と「獅子」の間で死んだ。獅子はバビロンを、ろばはイスラムを表している。不従順な預言者の死によって表されているが、ラオデキア的アドベンチズムには見えない二つの教理は、教皇制のメッセージ（獅子）と、第三のわざわいに関するイスラムのメッセージ（ろば）である。

エゼキエルの「暴風」は、イザヤ書第27章の「東風の日」にある「とどめられた荒い風」の象徴である。エゼキエルの「暴風」はまた、神のしもべたちに印が押されるまで押さえられている、黙示録第7章の「四方の風」でもある。エゼキエルの「暴風」は、エゼキエル書第37章の「四方の風」からの彼のメッセージであり、死んだ干からびた骨に命を与えて強大な軍勢とする。『粗悪なしっくい塗られた壁』を打ち倒すエゼキエルの「暴風」は、第三のわざわいの「後の雨」のメッセージである。

エゼキエルの「あふれんばかりの驟雨」は教皇権の象徴であり、さらに具体的には、アメリカ合衆国で間もなく来る日曜法から始まる日曜法危機の期間の象徴である。ロバと獅子の間で死んだユダの不従順な預言者は、ロバ（第三の災い）の到来である2001年9月11日と、間もなく来る日曜法（獅子）の間に起こる、ラオデキア的アドベンチズムの死を表していた。ラオデキア的アドベンチズムの死は、諸国が怒らされつつも抑えられていた2001年9月11日に始まり、間もなく来る日曜法で終結する、十四万四千人の封印の期間の中で起こる。不従順な預言者によって例示されているように、彼らの死は、決して「嘲る者の会衆」に戻ってはならないと直接知らされていたにもかかわらず、背教的プロテストантиズムの方法論へと戻ったためにもたらされる。

彼らの死は、十四万四千人への封印の歴史の中で起こる。神の民が封印されるやいなや、滅びの天使たちがその働きを始める。2001年9月11日から間もなく到来する日曜法に至るまでの間、生ける者の裁きは神の教会において執行される。というのも、裁きはエルサレムから始まり、本来民の守護者であるべきであった古老たち、すなわち四世代にわたり自らの責務を放棄してきた者たちから始まるからである。その期間に印を受ける者たちは、諸国民に掲げられる旗印である。彼らは間もなく来る日曜法の前に封印を受ける。なぜなら、神のほかの群れが警告を受ける唯一の方法は、日曜法の危機において神の印を持つ男女を見ることだからである。

聖霊の働きは、世に罪と義と裁きとを悟らせることである。世が警告を受けることができるのは、真理を信じる者たちが真理によって聖められ、崇高で聖なる原則に従って行動し、神の戒めを守る者とそれを足で踏みこむ者との間の境界線を、高尚な意味において示しているのを見ることによるのみである。聖霊による聖化は、神の印を持つ者と、偽りの安息日を守る者との違いを明確にする。試練が来るとき、獣の刻印が何であるかがはっきり示される。それは日曜日を守ることである。真理を聞いた後

でもなおこの日を聖なるものと見なして守り続ける者は、時と律法を変えようと考えた罪の人の印を帯びている。聖書訓練学校、1903年12月1日。

ラオデキヤ的アドベンチズムの死は、「後の雨」の歴史の中で成就する。その「後の雨」は2001年9月11日に小雨として降り始め、間もなく到来する日曜法の時、神が永遠に封印された民を整え、旗印として高く掲げるときに、限りなく注がれる。

その時期には、獣の刻印を受ける備えをしており、やがてそれを受けることになる、ラオデキヤ的状态にあるアドベンチストたちは、エゼキエル書8章で太陽にひれ伏す二十五人によって表されている。彼らは、その時代に真の見張り人たちが宣べ伝えている真の「後の雨」のメッセージの模造品を表す、エゼキエルの偽りの「平安と安全」のメッセージを受け入れた者たちである。その偽の「後の雨」のメッセージの土台は、実際にはサタンの象徴であるのに、ダニエル書の「常の」をキリストの象徴だと見なすことにある。その偽りの基礎的信念こそが、「エルサレムの民を治めるあざける者たち」が自分たちの練られていない漆喰の壁を築くために用いる教義である。

「the daily」をキリストの象徴として同定することは、1931年に「嘘」によって歴史的に確立された。それ以降、偽造の硬貨と宝石の未強化の壁が築かれた。その「壁」は、汚れを払うブラシを持つ男が到来して御自分の床を徹底的に清めるとき、崩れ落ちる運命にある。その清めは、「暴風」（2001年9月11日のろば）と「あふれんばかりのわか雨」（間もなく到来する日曜法の獅子）の間にある、預言的な歴史の期間において成し遂げられる。

その歴史において、不従順な預言者は殺され、ベテルの偽預言者の墓に葬られる。ホワイト姉妹は、預言の「壁」を神の律法であると示している。

ここで預言者は、世がこぞって真理と義から離れ去っている時代にあつて、神の御国の土台となる原則を回復しようと努めている人々を描いている。彼らは、神の律法に生じた破れ口を修復する者たちである——その律法は、神がその選びの民を守るために彼らの周囲に設けられた城壁であり、その公義と真理と清さの戒めに従うことこそが、彼らにとって絶えざる守りとなる。

預言者は、疑いようのない明確な言葉で、城壁を築くこの残りの民に委ねられた特別な務めを指し示している。「もし安息日にあなたの足を止め、わが聖なる日に自分の好むことを行わず、安息日を喜びと呼び、主の聖なる日を尊いものとし、それを重んじ、自分の道を行わず、自分の好むことを求めず、自分の言葉を語らないなら、そのとき、あなたは主を喜びとし、わたしはあなたを地の高い所を歩ませ、あなたの父ヤコブの嗣業によってあなたを養う。これは主の口がそう語ったからである。」イザヤ書58章13、14節。『預言者と王』678ページ。

アドベンチズムの第四世代の始まりは、第三世代の始まりと同様に、一冊の本の出版によって画される。第三世代は、W. W. プレスコットによる『The Doctrine of Christ』の出版で始まり、その世代は『Questions on Doctrine』の出版で終わった。『The Doctrine of Christ』は、意図的にミラー派の預言的メッセージを欠いた福音を提示した。『Questions on Doctrine』は、キリストによって成し遂げられる聖化の業を否定する福音を提示した。『The Doctrine of

Christ』は、預言史の (chazon) ビジョンの光を取り去り、『Questions on Doctrine』は、キリストの「appearance」の (Mareh) ビジョンの光を取り去った。

その二つの書物のあいだの時期に、「タンムズのために泣く女たち」によって表される偽りの「後の雨」のメッセージが展開された。その歴史の中で、「1931年の偽り」が推進された。その第三世代（忌むべきもの）は、第三の教会であるペルガモの妥協によっても表されている。第三の教会における妥協の象徴は、神学と医学に関する規則を定めて押し付ける世俗の機関から認定を得ようとする働きを指し示している。真理の妥協がもたらされたのは第三世代においてであり、そこには、改ざんされた写本から翻訳された聖書の導入と、その使用の強調が含まれていた。

1957年、『Questions on Doctrine』は、福音の根本的真理に対する屈服を示すものだった。その真理とは、イエスは私たちを罪から救うために死なれたのであって、罪の中にあるまま救うために死なれたのではない、ということである。人は神の御言葉に従順でありえないとするカトリックおよび背教したプロテスタントの教えは、サタンの永遠の論法である。サタンが「あなたがたは決して死ぬことはない」と主張するとしても、人は神の御言葉に従うことができ、また従わなければならない。人は罪に打ち勝つことができず、したがって、イエスが再臨の際に人々を従順なロボットに魔法のように変えるまで神の律法に従うことはできない、という墮落した背教的プロテスタントの見解は、『Questions on Doctrine』の教えに取り入れられた。

1957年に、ラオデキア的アドベンチズムの第四世代が始まり、その未練りの漆喰の壁（律法）が確立された。これによって、十四万四千人の封印の時期の終わりに、二十五人の古老たちが太陽にひれ伏すことを可能にする論理が整えられた。その未練りの漆喰の壁、すなわち神の律法を守ることは不可能だという信念は、間もなく来る日曜法の時に、政教分離の「壁」が取り除かれると、一掃される。日曜法はあふれ流れる激しい雨であり、イザヤの表現では「氾濫するむち」である。そしてその洪水は、間もなくアメリカ合衆国で施行される日曜法から始まる。

アメリカ合衆国における日曜法の時、敵（教皇）は「洪水のように」（押し寄せる災禍）なだれ込んで来る。そのときこそ、彼に対して「旗印」が掲げられる。そのとき、「日ごとの務め」の誤った適用の上にラオディキア的アドベンティズムが築き上げた「未練りの壁」は、押し流される。

彼らの行いに応じて、彼は報いを与える。敵対する者には憤りを、敵どもには報復を。海の島々にも報いを返す。こうして、人々は西の方では主の名を、日の出る方ではその栄光を畏れる。敵が洪水のように押し寄せるとき、主の霊がこれに向かって旗を掲げる。贖う者がシオンに来る。また、ヤコブのうちで背きから立ち返る者たちのところに来る、と主は言われる。主は言われる、わたしについて言えば、これが彼らとのわたしの契約である。あなたの上にあるわたしの霊と、わたしがあなたの口に置いたわたしの言葉は、今より、とこしえに、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、あなたの子孫の子孫の口からも離れない、と主は言われる。起きよ、光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に昇ったからだ。見よ、闇は地をおおい、濃い闇がもろもろの民をおおう。しかし、主はあなたの上に昇り、その栄光があなたの上に現れる。国々はあなたの光に、王たちはあなたの昇る輝きに来る。イザヤ書59章18節-6

0章3節.

異邦人は、神の栄光がその民の上に臨むとき、光のもとに来る。そしてそれは、敵が洪水のように押し寄せるときに起こる。その敵が押し寄せると、神は彼に対して旗印（標旗）を掲げる。異邦人が応じるその民の上にある主の栄光とは、主の品性であり、その品性は罪を犯さない。人は罪に打ち勝つことができないと教える「平和と安全」のメッセージは偽りである。そのメッセージは、2001年9月11日に到来した真の「後の雨」のメッセージの時に宣べ伝えられる偽りの「後の雨」のメッセージである。その偽りのメッセージは、神の律法、すなわち「城壁」に関する偽りのメッセージである。その偽りの教理は『Questions on Doctrine』という書に示されており、それはラオデキア的アドベンチズムにおける第四にして最後の世代の到来を画した。

2001年9月11日、ラオデキア的アドベンチズムの四つの背教が、父祖の罪をもってその最後の世代を試みるために到来した。その日、神はご自分の民に、エレミヤの言う「昔からの道」へ立ち返るよう導かれた。そうするなら、ミラーの宝石として表されている土台となるメッセージを理解し、受け入れることができたであろう。そうすれば彼らは後の雨を見いだすはずであり、エレミヤはそれを「安らぎ」と呼んだ。「昔からの道」に立ち返れというこの呼びかけは、1863年の背教を生み出した試練の繰り返しであった。

2001年9月11日は、イザヤのいう「東の風と荒い風の日」であり、その日に、黙示録14章3節および15章3節でモーセと小羊の歌を歌う者たちによって「ぶどう園の歌」が歌われるはずであった。その歌は、ラオデキアへのメッセージであり、かつての選民がその時見放されつつあることを示すものであった。というのも、神はそのとき、ぶどう園の本来の実を結ばせる男女にご自分のぶどう園を与える過程にあったからである。そのぶどう園のメッセージこそラオデキアへのメッセージであり、それは1888年の反抗の際にジョーンズとワグナーによって提示されたメッセージであった。

2001年9月11日に後の雨が始まり、ハバクク書第2章の論争の中で、二つの板のメッセージを提示したある一群の人々が指し示された。彼らはエレミヤの「古き道」に立ち返り、イザヤが「一行一行」という方法論に従う者にもたらされると示す「休息と潤い」を受けていたからである。彼らが関わった論争は、「タンムズのために泣く女たち」に象徴される偽の後の雨のメッセージに対するものであり、そのメッセージは眠っているラオデキヤの人々を「平和と安全」のメッセージで安心させていた。

「平和と安全」のメッセージは、人間が罪を犯さずにいることは不可能であり、ゆえに神は彼らを罪のうちにあるままでしか義としえず、またそうされるのだと主張する。嘲る者たちは、自分たちの「平和と安全」のメッセージこそ、ジョーンズとワグナーが提示した信仰による義認の真のメッセージだと主張するが、神が義とする者はまた聖められるという真理をないがしろにしている。というのも、神は人々を罪の中にあるままで救うためにではなく、罪から救うために死なれたからである。

2001年9月11日は、教会とこの地の忌むべき行為のゆえに嘆き叫ぶ者たちに代表される一つの階級が神の印を受けて終結する、十四万四千人の封印の期間の始まりを画した。そして、もう一方の階級は、第三天使の最終の働きが行われている神殿に背を向け、太陽にひれ伏している。ミラー派の歴史は第三天使の運動の歴史を例証しており、その際、クラ

イマックスは後の雨のメッセージと、それが食べることを選ぶ者たちに生み出す経験をめぐりものとなる。

次回の記事でこの研究を続けます。

先入観を捨て、この真理を受け入れることをよしとしない心が、ミネアポリスにおいてワグナーおよびジョーンズの兄弟たちを通して与えられた主のメッセージに対して示された反対の大部分の根底にあった。サタンはその反対を煽ることによって、神が彼らに授けたいと切望しておられた聖霊の特別な力を、私たちの民から大いに遮断することに成功した。敵は、五旬節の日の後に使徒たちがそれを宣べ伝えたように、彼らが真理を世界に運ぶうえで本来彼らのものとなり得た効力を、彼らが得るのを妨げた。全地をその栄光で照らすはずの光は拒まれ、私たち自身の兄弟たちの行動によって、大いに世界から遠ざけられてきた。『選ばれたメッセージ』第1巻、235。